

畑雑草の幼植物

(2) タネツケバナとミチタネツケバナ

(独)農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター 浅井元朗

タネツケバナ (*Cardamine flexuosa* With.), ミチタネツケバナ (*C. hirsuta* L.)はいずれもアブラナ科タネツケバナ属の一年生草本である。両種とも、主に秋季に発芽、出芽して、越冬後、春季に開花・結実する。タネツケバナは春季に出芽後、夏季までに、あるいは晩夏季に出芽して初冬までの短期間に開花・結実することもあるが、ミチタネツケバナの開花は春のみである。

タネツケバナ属の植物の多くは湿った場所に生育するが、ミチタネツケバナは道ばたや芝生など、水はけの良い立地に生育し、水田土中では種子が越冬できない。一方、タネツケバナは代表的な冬季の水田の雑草である。冬季に湿潤な地域でのムギ作で主要な雑草で、密生すると生育初期の雑草害を及ぼすが、出穂期以降に影響を及ぼすことは少なく、ムギ類の収穫時には枯死している。

タネツケバナは日本在来種であるのに対し、ミチタネツケバナはヨーロッパの原産で、1970年代の鳥取県の標本が日本での初記録であり、1990年代以降、急速に日本全国に分布を拡大中である。

両種とも子葉は広卵形で先がわずかに凹み、長さ約2mm。無毛で柄は長い(写真-1:タネツケバナ, 写真-2:ミチタネツケバナ)。ミチタネツケバナの子葉が円形に近い。葉は互生で、第1~3葉は先がわずかに凹んだ腎形となる。タネツケバナが無毛であるのに対し、ミ

チタネツケバナは表面にまばらに毛がある(写真-3:タネツケバナ, 写真-4:ミチタネツケバナ)。両種とも第3葉までは単葉だが、第4葉以降、3小葉となり、その後次第に小葉の数を増してゆく(写真-5:タネツケバナ, 写真-6:ミチタネツケバナ)。冬季は羽状に切れ込んだロゼット葉を地表面に広げる。タネツケバナは小葉が3裂することが多いが、ミチタネツケバナの小葉は切れ込みが少なく卵形である。また、ミチタネツケバナの方が頭小葉が大きい傾向がある(写真-7:タネツケバナ, 写真-8:ミチタネツケバナ)。

開花はミチタネツケバナの方が1~2週間早く、茎葉の枚数が少なく、開花時にもロゼット葉が残る(写真-9)。ミチタネツケバナの花弁は長さ2~3mmで、ほとんどが雄しべは4本(写真-10)。果実は花茎に沿うように直立する。一方、タネツケバナでは花弁の長さ3~4mmで、雄しべは6本ある。果実は斜めにつく(写真-11)。花期には茎基部の葉は枯れ、茎葉のみとなっていることが多い。しばしば、春耕前の水田に大群落をつくる(写真-12)。両種とも成熟した果実は弾けて、周辺に種子をばらまく。

参考文献

工藤洋 2012. ミチタネツケバナの分布拡大過程をたどる 森田竜義編著「帰化植物の自然史」北海道大学出版会, 札幌, 127-148



写真-1 タネツケバナの子葉



写真-4 ミチタネツケバナ 2葉期



写真-2 ミチタネツケバナの子葉



写真-5 タネツケバナ幼植物



写真-3 タネツケバナ 3葉期

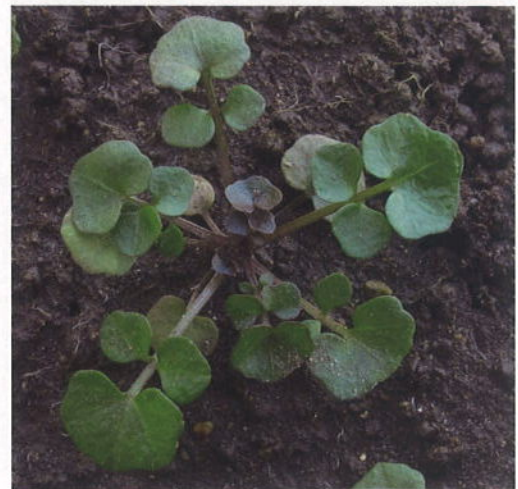


写真-6 ミチタネツケバナ幼植物



写真-7 ロゼット期のタネツケバナ



写真-8 ロゼット期のミチタネツケバナ



写真-9 開花期のミチタネツケバナ。ロゼット葉が残る。



写真-10 ミチタネツケバナの花器と果実



写真-11 タネツケバナの花器と果実



写真-12 水田に群生したタネツケバナ